令和６年度岡崎市教育研究大会リポート

１ | １１A | 英語（小）

岡崎市立矢作北小学校　村井　恵美

２　研究テーマ

OK-English を活用した、児童の自発的な英語活動への取り組みを目指して

～小学２年生　OK-English の先へ～

３　研究概要

（１）主題設定の理由

「50 分の授業で、生徒はどれだけ英語を話しているのだろうか。」と、ある時言われたことがある。これまで様々な活動や手法を取り入れて英語の学習を進めてきたが、アウトプットよりもインプットが多い授業では、身につくものも身につかないだろう。本校では、毎朝１年生から４年生が OK-English を視聴している。しかしながら、ほとんどの教員は児童の視聴させるだけにとどまっていて、OK-English を通して児童の英語力が身についているのか、疑問に思う。本研究では、OK-English を活用して、英語表現を習得して児童が英語活動を楽しめる授業に取り組みたいと考えた。

本学級は、男子 13 名女子 16 名で構成されており、活発な児童が多い。他教科の学習では、興味がある話題になると率先して話をしよう、やってみようとすることができる。さらに、助言をすると、一生懸命考えを書こうとする姿も見られた。一方で、友達や教師の話を聴くことや、音読発表やスピーチなどの自己表現活動は苦手な児童が多い。また、やったことがないこと、できないと思うことへの活動意欲は低いように感じる。週や Unit の始めの OK-English を視聴するときは、英語を言ってみようという児童は少ない。話したことのないことや慣れない外国語を話す不安感が伝わってくる。週の終わりになると、表現や動画内容に慣れてきて、退屈さを感じているように見受けられる。

そこで、本研究のテーマを上記のように設定し、OK-English を軸として活動を展開し、児童が英語を話せる楽しさや、英語でも楽しく活動できるということを実感し、自発的に活動に取り組めるようになってほしい。

（２）研究の仮説と手だて

①　目指す児童像

英語でも活動できる楽しさを知り、より良い表現を用いて、積極的に活動しようとする児童

小学２年生に外国語活動の評価はないが、上記の児童像を目指すにあたって、指導と評価の一体化を鑑みて、以下のような具体性をもって目指す児童像としたい。

【知識・技能】どのような場面で、どのような英語表現が使われるのかを理解することができる。

【思考・判断・表現】英語表現に合った動作をしたり、相手の質問を聞き、適切な答えや自分の考えを伝えたりして、友だちと活動することができる。

【主体的に学習に取り組む態度】より自然で楽しい活動にするために、友達の姿や教師の助言からより良い表現方法を知り、習得しようとする。

②　研究の仮説

仮説１　動作化しながら練習することで、表現の意味を理解することができるだろう。

仮説２　アウトプットをする時間を増やせば、場面に応じた適切な表現を用いて、自信をもって友達と活動することができるだろう。

仮説３　教師の模範会話や、他の児童が称賛されている姿を見ることで、友達とのやり取りの仕方を修正し、より自然で適切なやりとりをすることができるだろう。

③　手だて

仮説１に対する手だて

（a）OK-English を視聴する際、教師がジェスチャーを交えて伝えたり、練習したりする。

（b）教師が活動の模範を示し、同じようにやってみる場を設定する。

仮説２に対する手だて

（c）曜日や児童の実態によって、視聴方法を変える。

（d）主活動にあった場面を設定し、それに合った教具を準備する。

（e）児童一人一人の活動時間を増やすために、グループでの活動を取り入れる。

仮説３に対する手だて

（f）適当な場面で、教師が具体的に称賛する。

（g）児童がやりとりを発表できる「チャレンジタイム」を作り、１授業において２回設定する。

④　抽出児童 A について

児童 A は、興味のあることや自分の考えがもてた時には、発言しようとする姿勢がみられる。OK-English を視聴していても、知っている単語やイラストが出てくると、大きな声で言うので、「やりたい」という意欲は感じられる。しかしながら、理解するまでに時間がかかり、教師の指示や説明も聞いてからすぐに活動に取り組むことがなかなか難しい。英語活動においては、自信がないとほとんど声を出さず、見ているだけになる。

（３）実　践　～Unit 2 Part 1 と Unit 3 Part 2 の活動を通して～

①　OK-English 視聴計画　１週間の流れ

月～水曜日	input	・動画を視聴して、表現や発音を学ぶ。 ・動画や教師の発音を聞いて、真似して覚える。
木曜日	input ⇔output	・歌とチャンツのみ視聴し、教師や数人の友達に質問したり答えたりできるようにする。
金曜日	output ⇔input	・歌のみ視聴し、教室内を歩き回って多くの友達に質問したり答えたりする。回数をこなすことで、発話に慣れる。発表を通して、よりよい会話の仕方や表現を身につける。

児童のアウトプット活動をより多く設定するために、月曜日から金曜日まで、どのように OK-English を視聴し、活動に入るかを考えた。１週間に１Unit、１part を視聴する流れである。月曜日から水曜日は動画の視聴を主とし、インプットを重視した。水曜日には、動画にある表現を使って、実際に児童が行う活動を教師が模範で見せた。木曜日は歌とチャンツのみを視聴し、いったん動画を止めた。そして教師から児童による活動、１人の児童から全体に向けた活動を展開した。児童は、そこまでに活動の流れを把握し、金曜日には児童対児童の活動をグループや個人間で行い、アウトプットを中心に活動を展開した。

②　アウトプットに向けたインプットの取り組み（月曜日から木曜日）【手だて a, b, f 】

月曜日に重要なのは活動の見通しを持つことである。動画にはスキットが計３回出てくる。１回目では、何をしているのか、何を聞いているのかを知る。２回目で、登場する子どもと一緒に字幕を見ながら発話し、３回目は子どもの音声が流れないので児童だけが発話する。しかし、初日は内容を把握することに努めた。１回目では、単語も英語表現も分からないので、登場する人物の動きやイラストから何をしているか見取った。児童は新しい動画に出てくるもの、やっていることに興味を示していた。単語やチャンツでの練習を経て、２回目のスキットで「何をしている？」「何て言っていたと思う？」と児童に問いかけ、内容に目を向けさせた。正答した児童はもちろん、そうでない児童にも、“Good job!” “Very good!”

と発言したことを称賛した。一方、児童Ａは「何て言っているか分かんない。」を何度も口にして、真似して言ったり内容を推測しようとしたりはしなかった。

火曜日は、インプットを重点に視聴した。２回目でも「やってみよう」「言えるようになりたい」と意欲をもって発声練習する児童は、あまりいない。Unit 2 Part 1 では big, small、Unit 3 Part 2 には、Which box do you like?などの表現が出てくる。（資料１）そこで、チャンツで練習する際、どんな意味の語句や表現を練習しているのかが分かるように、ジェスチャーで示した。【手だて a】すると、それを真似て動きながら声を出す児童が増えていった。また、机間巡視しながら、動作と言っていることがあっている児童、大きな声で言えている児童には“Good job!”と元気よく声をかけて回ったり【手だて f】、上手に声に出せていない児童と一緒にジェスチャーを付けながら練習したりした。児童 A も、最初から一人で声を出すことがなかったので、隣で一緒に身振り手振りを付けて語句や表現の練習をし、できたときには「上手に言えたね」「大きな声で言えたね」と称賛した。

今回の実践で出てくる表現

Unit 2 Part 1	Unit 3 Part 2
white	big
black	small
big	box
small	present
Let's see.	Which box do you like?
I got it.	
That's right.	I like the big box,
It's a (dog).	I like the small box.
★What's this?	Here you are.

★はチャンツで出てきていないが、スキットに出てきた表現　（資料１）

水曜日は、単元で使う表現に慣れてきたので、児童を巻き込みながら活動の模範を示した。【手だて b】活動は、基本的に OK-English でやっていた内容にした。本学級の習得度を考えた時、発展的な活動よりも、基本的なことを習得し、活用できたほうが楽しさを感じられるからだ。また、当初は水曜日もインプット重視だったが、児童が視聴に飽きてきたため、動画視聴はチャンツで止め、その後は教師対児童の活動にした。【手だて c】Unit 2 Part 1 では、教師が動物のイラストが描かれたカードを数枚用意し、それを少しだけ見えるようにして“What's this?”と全体の場で児童にたずねた（資料３）ここで習得させたい表現は、① It's a …. ② I got it. ③ That's right. 動画にはないが、④ Hint, please.も加えた。活動になると、児童はとても意欲的になる。半数以上の児童が挙手をして答えようとした。当てられた児童は“rabbit!”と元気よく答えた。最初の数人は It's a を付けずに答えた。しかし、本当は“It's a rabbit.”と答えてほしい。そこで、３，４人目くらいから「テレビではなんて答えていたかな。It's a …?」と問い返した。しかし、発言した児童は付けて答えられない。教師の意図を理解した児童が「It's a を付けるんだよ。」とアドバイスしていた。また、要領を理解した児童を当てて“It's a penguin.”と答える様子を他の児童に見せた。その姿に教師が“That's right. Good job!”と元気よく言うと、It's a を付け忘れていた児童たちは、教師の助言を聞けば言えるようになった。また、I got it. を習得させるために、挙手をするとき、言えている児童を称賛し、当てた。すると、それを見た他の児童が真似をして多くの児童が“I got it.”と言ってから挙手するようになった。Unit 3 Part 2 での“I like the…”も同様である。この場面において、児童Ａは、最初動物名だけしか答えていなかった。It's a を付けて言えても、自信なさそうに小声だった。

水曜日の教師との会話（資料２）

Unit 2 Part 1	
T	What's this?
S1	Rabbit!
T	テレビではなんて答えていたかな。It's a …?
S1	…
T	OK. Good job.
T	Next Question. What's this?
S2	Penguin!
S3	It's a を付けるんだよ。 It's a monkey.　（小声で）
S2	It's a monkey.
T	That's right. Good job!

資料３

木曜日、前回の活動後に「私もクイズを出したい」という児童がいたので、OK-English の歌とチャンツを練習した後、動画を止めて１人の児童が全体にクイズを出す場面を設定した。【手だて c】実際、この活動が主活動となるので、１人の児童が全体に対してクイズを行うことは全体にとってよい練習となり、とても有効であると考える。ここでも、動物名だけ答えている児童に対し、“It's a...?”と教師が問い返した。すると、前回よりも児童は“It's a bear.”とスムーズにより適切に答えることができた。一方、

出題する側の課題は、“What’s this?”は言えても“That’s right.”と返せるかどうかだった。最初にクイズを出題した児童は、当てた児童が答えたら自席に帰ってしまった。そこで、教師が「クイズに当たったら、何て言ったらいいのかな。」と問うと「That’s right.と言えばいい。」と児童が答えた。多くの児童はクイズを出したことに満足してしまっていた。なので、言い忘れている児童に声を掛けたり、言い慣れていなくて恥ずかしがっている児童とは一緒に言ったりして、まずは声を出させることに努めた。（資料４）そうして、That’s right.と言えた児童には思いっきり“Good job!”や“Very good!”と称賛した。

代表児童が教室の前でクイズを出す様子（資料４）

③　実践１　Unit 2　Part 1　“What’s this? It’s a panda.”　【手だて d, e, g】

前回では、個人対全体の活動だったため、時間が十分に取れず、出題したくてもできない児童や、まだやりたい、もっと上手くやりたいと思っている児童がいた。そこで、本実践と次の実践（Unit 3 Part 2）は、通常は金曜日の朝に活動するところを、授業時間で行った。

実践１では、児童が“What’s this?”と言ってクイズを出し、解答者は分からなければ“Hint, please.”と言って、隠されている絵をもう少し見せてもらえるようにお願いする。答えるときは“I got it. It’s a …”と言い、正解であれば、“That’s right.”と伝えることが求められる。より自然なやり取りができるように、次のような手順で行った。

①　教師が主活動の模範を示す。
②　席を立って、多くの友達とクイズを出し合う。
③　「チャレンジタイム」と称した発表の場を設定する。
④　多くの友達と再度活動を行う。
⑤　再度「チャレンジタイム」を設定する。

OK-English を軸としているので、動画の視聴から始めた。本時で使う表現の意味と音声を確認するために、ジェスチャーを付けてチャンツを練習して楽しい雰囲気を作り出した。そして、水曜日に示した通り、教師が主活動の模範を示した。活動をより具体的にするために、動物が描かれたカードを６枚程度と、それを隠すために切った封筒を児童一人一人に準備した。カードは 40 種類あり、同じ動物でも絵柄や色が違うものを用意した。【手だて d】

これまでの教師の模範活動や代表児童の姿を見て、児童はクイズに取り組んだ。自分のクイズカードがあることに喜び、出題する絵の順番を考えたり、見せる部分を工夫したりしながら取り組んでいた。児童 A も他の児童と同様に楽しそうに取り組んでいる様子が見られた。封筒から絵を一部だけ見せ、相手の方を見て“What’s this?”と質問することができた。しかし、答えるときには動物名だけになっていた。（資料５）まだ英語で話すことに慣れていない様子が伝わってきた。

主活動にて、児童 A が友達にクイズを出している様子（資料５）

「チャレンジタイム」は、友達とのやり取りをみんなの前で発表する場だ。児童にとっては、やったことを発表する場だが、教師にとってはより良い姿を見つけ、称賛し、より良い表現方法をフィードバックする場である。【手だてｆ】１度目のチャレンジタイムで、発表したペアのやり取りを見て、「It’s a をちゃんと言えていたね。」「That’s right.を、手を付けて言えていたね。」「相手の顔を見て話せていたね。」など、具体的に良かったところを伝えた。すると、次のペアからはそれを自分に取り入れて発表することができた。児童全員が、より良い表現方法を知った上で、再度友達との活動に臨んだ。残念ながら、時間がなくて最後のチャレンジタイムを行うことはできなかったが、②の活動よりも多くの児童が Hint, please.や I got it. などの表現を使えていた。

児童 A がチャレンジタイムで、相手を見ながらクイズを出している様子（資料６）

④　実践２　Unit３　Part２　“Which box do you like? I like the big box.”　【手だて d, e, g】

Unit 3 Part 2 では、生徒がもう一人の生徒と ALT に“Which box do you like?”とたずね、“I like the big/small box.”と選んだら、中に大きなプレゼントや動く蛇が入っていて驚く、という内容である。

その様子を生かして、実践２ではすごろくのようになっているワークシートと、箱を２つ用意した。【手だて d】箱の中に１から３が書かれたカードを１枚ずつ入れた。そして“Which box do you like?”と相手に聞き、“I like the big box.”か“I like the small box.”と答えさせる。“Here you are.”と言って、相手に箱を渡し、中に入っていたカードの数字分だけ、マスを塗って進めるというゲームだ。

３人で箱を使って活動している様子（資料７）

最初に教師が代表児童と活動の様子を見せて、流れを確認した。説明するのではなく、All English で流れを見せることによって、より児童たちは何と言ったらいいのかが把握できた。その後３人１グループになって、練習した。（資料７）練習した後に、全体の前で発表する「チャレンジタイム」を設けた。【手だて g】最初のチャレンジをしたグループは“Here you are.”を言わなかったので、全体に向けて「渡すときに何て言うんだった？」と聞くと何人かの児童が“Here you are.”と答えた。次のグループの発表では“Here you are.”が言えていたので、全体の場で称賛した。【手だて f】それ以降、チャレンジしたグループは、誰もが“Here you are.”と言えていた。他のよかったところとして、箱を開けたときのリアクションがよかったことを確認した。次のグループでは、“Which box do you like?”とたずねるはずの児童が、なかなか言えなかった。その時、他の児童が小さな声で“Which box…”と教えていた。分からなかったり困っていたりしている人を助けるのはいいことだと伝えた。さらに、児童に発表したチームの良かったところをたずねると、「“Here you are.”と言ったら“Thank you.”と言っていた。」と、児童が気付くことができた。

チャレンジタイムでより良い表現ややり取りの方法を知ったので、もう一度活動の場を設定した。児童はワークシートにカードの数分だけ色を塗りながら、繰り返しやり取りを行った。最初、児童Ａはもじもじとした声で“Which box do you like?”と他の２人に聞いた。答えた２人に“Here you are.”を言わずに箱を渡していた。次に同じグループの児童Ｂが“Which box do you like?”と聞いて箱を渡すときには“Here you are.”と言っていた。それを聞いていた児童Ａが、２回目に質問して箱を渡すときは、“Here you are.”と言えていた。

活動の後に、もう一度「チャレンジタイム」を設定した。より良いやり取りを自信をもって発表する場である。ここで、児童Ａのグループが発表した。児童Ａは相手の方を見て、はっきりとした声で質問できた。“I like the big box.”と言った児童には大きい箱を、“I like the small box.”と言った児童には小さい箱を、ひとつずつ“Here you are.”と言いながら手渡せた。他のグループでも、最初のフィードバッグを生かして“Here you are.”や“Thank you.”と言って発表できた。授業を振り返ってみると、最初よりもすらすら言えていたことに気付く児童がいた。

（４）研究の成果と課題

①　研究の成果

本研究のテーマとして、「児童の自発的な英語活動への取り組み」を挙げた。仮説に対する手だての検証、そしてその後の児童の様子を紹介したい。

仮説１に対する手だての検証

OK-English を通した活動をするにあたって、活動の説明はほとんどしていない。月曜日から水曜日までの間で、動画を視聴し、語句や表現の意味をジェスチャーやイラストで確認しながら練習したり、教師による模範活動の提示した後に教師対児童でやり取りを見せたりして、活動のイメージをもったりイン

プットしたりしたからである。【手だて a, b】実際、木曜日や金曜日に活動するときに、いい慣れない言語に戸惑いはあるものの、何をしていいのかが分からず困っている児童はいなかった。また、その後のOK-English の視聴において、別のクイズが出てきたとき、自然と I got it.や Hint, please.と児童が言っていた。OK-English の単元ごとには関連性はないが、使える表現はある。その回で教えていないにもかかわらず使えたということ、児童は表現の意味や使う場面を理解していると言える。

仮説２に対する手だての検証

曜日によって視聴方法を変えたことで、活動にメリハリが付き、退屈そうに過ごす児童は減ったように思う。児童の活動に切り替えたことで、より児童は生き生きと英語を話すようになった。実際、「もっとやりたい。」「楽しそうだからやってみたい。」という児童がほとんどだった。【手だて c】一人一人教具を用意したいことで、児童はより多くの友達とやり取りを楽しむことができただけでなく、場面に応じた表現を使うことができた。一人一人に教具を用意することは大変だが、児童が自発的に英語を話せるようになるためには適当だと言える。【手だて d, e】

また実践後、活動で使ったカードや箱を使いながら、休み時間に互いに遊ぶ様子が見られた。実践１から数日たった後、自分で What's this?カードを作ってきて、帰りの会でクイズを出した児童もいた。

仮説３に対する手だての検証

本学級の児童は、自己の振り返りから改善点を見つけたりより良いやり取りを考えたりすることが苦手である。そのため、教師が称賛することによってより良い姿勢ややり取りを知ることができた。誰かが褒められている姿を見て、児童は「こうすればいいんだ」とその方法を取り入れることができた。【手だて f】チャレンジタイムが２回あることで、それまでの自分のやり方をさらに進化させ、より上手に友達と会話を楽しみ、自信をもって２回目のチャレンジタイムに臨むことができたのである。それは、教師が「相手の目を見て」などと教えるよりも何倍も効果的だった。【手だて g】

抽出児童 A について

指示や説明でなかなか理解できない児童 A にとって、OK-English で場面を見たりジェスチャーを用いて語句の練習をしたりしたことで、より意味を理解できたと考える。それだけでなく、教師、教師と児童による模範活動で、さらにやり取りのイメージを持てた。教具があることで興味関心を抱き、学級の前で発表することもできた。相手の目を見てやり取りできたことは、自信の表れだと考える。単元の最初は内容が分からず声を出さないことは未だにある。しかし、Unit 4 に入ったとき、教師のジェスチャーと動画のイラストを見て、「先生、何月かを言ってるよね。」と内容を自ら推測することができた。Unit 3 が終わった時点で、児童 A は「前よりも英語が話せるようになった。」とアンケートに答えている。

実践だけでなく、その後の児童の様子から見ても、仮説に対する手だてはどれも有効だったと言えるだろう。

② 今後の課題

依然、本学級の普段の OK-English への取り組む意欲は高くない。視聴しているときは、あまり声を出さず、退屈さを感じている児童もいる。ただ、自分でできることの楽しさを知った児童たちである。これまでに習得した表現や語句が他の場面でも使えることに気付き、「もっとこんなことしたい」と感じられる英語活動を展開していきたい。また、これまでに習得した表現や語句を合わせて、OK-English にないことにも挑戦できたらと思う。加えて、今はまだ教師対児童のやり取りで、活動内容が改善されている。友達と高め合える学習スタイルを形成されれば、より自然で楽しいやり取りができるに違いない。

OK-English は市小学校で視聴しているものである。より英語専科でない教員も取り組まなければならない。OK-English を活用したアウトプット活動ができるように、教具や活動内容等を共有出来たらさらにより多くの児童が英語を楽しめるのではないだろうか。